

国語科における「学ぶ力」を育てる単元学習の実践

単元「ことばの有り様を考える」を材料として

川 津 啓 義

I はじめに

来たるべき21世紀に備え、どんな社会の変化に直面しても人間として主体的に生き抜いていくことができる生徒の育成を願い、様々な実践研究が試みられている。それは、明治以来綿々と継承されてきた教科書絶対主義による画一的斉授業からの脱却を意味するものである。しかし、「言うは易く行うは難し」のことば通り、現場の教育は必ずしも思うようにいっていないのが実態である。その要因にはいろいろあるが、特に受験体制における知識中心主義の弊害は著しい。

このような状況の中で、国語科として如何に打開すべきか。本研究の課題である。

さて、画一的斉授業の問答法について、佐伯胖氏は「考えることの教育」（国土新書）の中で次のように書いている。— 従来の問答法でわからせようとすれば、わかるようになるのだが、しかし、それは本当にわかったのか。いわゆる、問答法では問いと答えが固定して、その問いを助言や発問で生徒たちをわかりきったところへ誘導していく。そういう意味の理解をねらって学習が進められていく。これは理解ということを誤解しているのであって、本当の理解とはいえない。そもそも理解とはプロセスであって結果ではなく、その生徒が何がわかったかということよりも、何をどのようにわかろうとしているかということが大切なのである。—

この斉授業による問答法は、今日もなお指導法の中核を成している。教師と生徒の1対1の取り引きの形をとってはいるが、所詮、全体相手の方法である。教師が問いかけて特定の生徒が答える。その際、教師は答えた生徒の出来ばえを評価しながら同時に、答えの波及効果を考えている。その生徒の答えが他の生徒たちにどう影響していくか。そしてその結果、授業の進行がどうなっていくかと図っている。これは、いずれもある範疇に生徒の発言を収めようとするもので、教育的ではない。生徒の理解とその表現化の実態は、もっと人間的なものである。教師と生徒、生徒と生徒の間に表現・理解の通じ合う真の教室になるためには、学ぶ者同士がその考えや感じを交流できる「学習室」にしなければならない。ここに本研究テーマである「単元学習」を設定した。

II 研究の基盤

1. 単元学習の意義

(1) これからの学校教育の展望

中央教育審議会の「教育内容等小委員会報告」は、いわば21世紀への教育を考えて打ち出されたものであった。今後、特に重視しなければならない視点として次の四項目をあげている。①自己教育力の育成、②基礎・基本の徹底、③個性と創造性の伸長、④文化と伝統の尊

重、これらの視点を立てるに至った背景として、次の指摘は重要である。

「今後における我が国社会の変化を的確に予測することはもとより困難であるが、情報化などの社会の急激な変化は更に継続していくものと思われる。加えて、高齢化の進行や国際社会における責任の重大など、我が国社会がこれまで直面したことのない新たな変化や新たな課題に取り組むことにもなるであろう。」

このような新たな変化や新たな課題に適切に対処するためには、主体的に変化に対応する能力をもち、個性的で多様な人材が求められるものと考えられる。主体的に変化に対応する能力としては、例えば、困難に立ち向かう強い意志、問題の解決に積極的に挑む知的探求心主体的に目標を設定し必要な知識・情報を選択活用していく能力、自己を抑制し、他者を尊重しつつ、良好な人間関係を築いていくことのできる資質などが重要視されるものとする。

また、これらの学校教育の在り方は、現行教育課程（昭和51年の教育課程審議会答申に基づいて改訂されたもの。）の次の三点を基本的なねらいとしていた。

- ① 人間性豊かな児童生徒を育てること。
- ② ゆとりのあるしかも充実した学校生活を送れるようにすること。
- ③ 国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視するとともに児童生徒の個性や能力に応じた教育が行われるようにすること。

従って、この視点は長期的展望に立った、大きな意味を持つものであった。ところで、21世紀への学校教育の課題を「主体的に変化に対応できる個性の人間の育成」と捉え、今日、「自己教育力の育成」（自己学習、自己形成、自己啓発、自己陶冶などの概念を総合したもの。）という視点がクローズアップされた。

この自己教育力の概念の具体的な意味内容を、次の三点にまとめてみる。

(ア) 学習意欲と意志の形成

自己教育力の核心は、主体的な学習意欲と意志の問題である。受験準備教育とか記憶中心の教育、偏差値による教育、また、現在の青少年に一般的にみられる無関心・無気力・無責任の傾向をいかに克服していくか。これからの学校教育にとって重要な課題である。

フライミヤ氏は、学校の基本目的は、子どもたちの学習を助けることだとし、学習することを尊ぶこと・とりわけ学習意欲の問題が重要だとし、次のように述べている。

「子どもたちの学習意欲を喚起するよう励ますことこそがく学習を価値づけることであり、多様な教育の目的の中でもっとも基本的なものであるといえよう。人間の活動としての学習の価値を信じることこそ、何よりも重要な学習方法でもある。つまり、子どもたちが自分の生活や人類の生活をよりよくする手段として学習にかかわり合うことである。結局、子どもの学習を助けるということは、子どもたちが学習そのもの——それは現実的・美的・知的・社会的・人間的なさまざまな方法でくり返し行われるものだが、——を、胸高まらせて生涯にわたって行う人間の営みとして価値づけることができるように援助することから始めなければならない。」

(1) 学習の仕方の習得

自己教育力の第二は、学習の仕方の習得である。「審議経過報告」では、次のように述べている。

「今後の社会の変化を考えると将来の日常生活や職業生活において、何をどのように学ぶか、という学習の仕方についての能力を身につけることが大切である。そのためには、学校教育において基礎的・基本的な知識・技能を着実に学習させるとともに、問題解決的あるいは問題探求的な学習方法を重視する必要がある。」

このように、これからの学校教育の在り方について学習の仕方の習得が強調されるのは、生涯教育の考え方にも通じる。P・ラングラン氏は、生涯教育の視点に立ち、これからの学校の性格として次のことを指摘している。

「生涯教育にとっては、十全の知識・十全の能力という概念は無縁のものになる。生涯教育の立場では、知識は常に変化するものであり、たえず発展するものである。ひとつの知識の質を完全にするためには、まさに一生涯かかると考えるのである。いちばん大切なことは、“学習のメカニズム”を獲得することである。そして、教材は教育の基本目標となるこうした学習を支える養分のようなものである。」

このように、これからの学校教育のあり方を学習の仕方の習得という視点から再検討しようとするとき、とりわけ教育の内容と方法にかかわって、次の諸点についてのアプローチが要請される。

- ① 学習の仕方についての学習を、単に学習の方法や指導の形態としてのみ捉えることはできない。それだけに基礎的・基本的知識や技能の習得はいっそう大事である。「構造的知識」という観点からの内容の精選が決定的に重要になる。
- ② 学習の仕方の習得という観点から、いわゆる総合的学習が再評価されなければならない。学習態度としても単なる知識習得学習でなく、問題解決的・問題探求的学習が要請される。
- ③ 学習の仕方の習得においては、学習態度の形成を見直さなければならない。J・デューイは、学習における思考の方法と同時に、それを支える態度の面が大事で、両者は切り離せない、という。従って、彼が思考の方法を支える態度としてあげるのは「すなおな心」「誠心誠意」そして、「責任性」である。
- ④ 学習の仕方の習得は、教科の面についてのみでなく、教科外活動としての特別活動がきわめて重要である。
- ⑤ 学習の仕方の習得という観点から、現行の入学試験をはじめとして、学校におけるテスト（評価のシステム）が根本的に改革されなければならない。
- ⑥ 情報化社会の傾向が増大する中で、「情報の主人公になれる人間」の育成ということが学校教育にとって重要な課題になる。従って、これまでの「情報伝達型」の教育から「情報処理」ないし、「情報選択型」の教育への転換を要請される。学習における直接経験はいっそう重要であり、現行の教育課程において強調されている「体験的学習」(動

労にかかわる)の重要性も認識しなければならない。

(ウ) 生き方の探求

これからの変化の激しい社会における生き方の問題である。このことは「生涯教育」の基礎を培うものとして学校教育の重要な視点とされた。とりわけ進路指導の充実と社会参加の促進を図るために青少年に奉仕活動などの場を与えることである。こうした生き方の指導によって「自己を高めること」と「他を高めること」とが統合的に結び合うのである。

(2) 単元学習成立の条件

国語科の顔はまさに多面的である。「言語要素的面」と「情報や内容面」とが対照的な取り組みをなす。国語科の単元学習はこの両者の間に入って両面を繋ごうとするものである。単元学習において、生き生きとした充実感を持てるのは、何よりも生徒たちの生きた表情へと連動されていくからである。具体的な状況に立ち向かっているときに働く力は「学ぶ力」である。この学ぶ力(自らの力で問題を解決していこうとする主体的な構え)の育成が「単元」にはかならない。

単元は指導者に思想がなくてはならない。教育や国語科の指導や生徒たちの認識や社会状況などに対するその人なりの思想があって初めて単元が成立する。これが「単元設定の理由」である。

(ア) 生徒の手で創られる単元

教師は生徒の言語生活の実態をしっかり捉えなければならない。生徒の一人ひとりの言語経験を生かした言語の大きな学習のまとまりである。従って、聞いたり、話したり、読んだり、書いたりする活動を通してある目的を充足させて人間や生活の全体を引きあげることになる。

教材は正しくは学習材である。学習者がその資料、材料と出会って追求し、深め、調べようとしたとき、初めて学習材として息を吹き出す。学習材は学び手の個性に従ってさまざまな表情を持ち、その関わり方如何によっていろいろな角度や視点が生まれることになる。

(イ) 生徒が個別化され、異質な活動を尊重する単元

生徒たちに「集める」「連想する」「分類する」など作業学習をさせながら、一人ひとりの学び手の心を捉える。そして、次のようなことばで精神を満たすのである。「うん、知っている」「あっ、見つけた」「へえ、そうなのか」……。こういう一種の知的感動を生徒の内心にわきおこさせる。

「私の〇〇」という単元は、単元として有力である。それは個を大事にするという個の原則に合っているからである。他の真似のできない一人ひとり違った経験をするので、ここでは「できる子、できない子」というものさしは存在しない。従って、優等生中心主義の指導に陥ることはないのである。

(ウ) 学習の結果よりも、プロセスを大切にする単元

前述した佐伯胖氏のことば、—— そもそも理解とはプロセスであって結果ではなく、

その生徒が何がわかったかということよりも、何をどのようにわかろうとしているかということが大切なのである。——という捉え方である。

単元は学習者がある目的のために探したり、調べたりまとめたりするひと続きの学習活動によって成っている。必要に応じて、調査・研究・整理の対象や方法を変える「変容性」である。単元学習は、連続性と変容性（柔軟性）という特色がある。その他に、「関連性」があり、聞いたり、話したり、読んだり、書いたりする学習活動の中で自然に関連され、結合されていくプロセス単元である。

(三) 学習訓練の基本を「聞くこと」におく単元

手を挙げないで考える習慣、答えようと構えて思い悩んでいる状態などをどのように自覚的に教えているか。学習訓練の基本は教室における成員の一人ひとりが、学習の進行に合わせて、それに身を置き学習の流れに沿って共に考え、問題を上げたり絞ったり、比べたり取捨したり、まとめたり深めたりしていこうとする態度である。その学習感覚をどう形成し、どう確かにしていくかが訓練の基本となる。

その際、①教室における学友や指導者の発言に耳を澄ませ、②正しく聞きとって考え、③必要に応じて記録をし、④集団学習の場合には協力的に参加しようとする態度が必要である。いわゆる「鉛筆で聞く」ことや「疑問を持ちながら聞く」「問題や課題を発見しようとする聞く」ことが要請される。従って、学習訓練の基本を「聞くことの指導」から始めたいのである。

Ⅱ 単元学習の実際

単元 「ことばの有り様」を考える —— 日本語の「察しの文化」 ——

1. 単元設定の理由

私にとってすごくうれしい事があったので、友だちに「ねえねえ、きのう私ね……」と、うれしくてしょうがないという感じで話していました。話し終わると、冷たく一言、「それで、/」ということばが返ってきました。

「それからどうしたの」ではなく、「それがどうしたの」という意味だったのです。すごく腹が立って「言わなきゃよかった」と思いました。すごく冷たくて、何かで頭をガツーンと殴られ突き放されたようでした。しかし、自分も知らずにどこかで、人を傷つけているのかと思うといやな気持ちになりました。（N子の取材カード「気になることば」より）

「別に・しげえ、/」に代表されることばの乱れは著しい。身勝手さ・粗雑さ・思いやりのなさによることばの暴力は、生徒の心をむしばんでいる。

ことばは、本来「通じあう」「わかりあう」ための人間に与えられた唯一の贈りものである。ことばによってよいコミュニケーションの場がつくられ、思考し、認識する。いわゆる、文化

の創造である。ところが、今日、そのことばが逆の道具として使われている。このような実態を捉え、本来あるべき「ことばの有り様」を考えていきたい。

人の心を察し、思いやる気持ちによってことばは甦る。日本人の察しの文化に根づいた「ことば」の単元を設定した。

◎「察しのことば」を視点にして 生徒の集めた「ことば」を次のように分類した。

(1) 自分に言い聞かせることば

「よしノ」「打倒〇〇ノ」……………。

(2) 人に話しかけることば(話しかけられることば)

① 転移することば

〔プラス傾向のことば→マイナス傾向のことばへ〕 ⊕ → ⊖

ア、プレッシャーことば・・・がんばれ…。

イ、誇大ことば・・・すごい…。

ウ、嫌みことば・・・おもしろ、よかったね…。

〔マイナス傾向のことば→プラス傾向のことばへ〕 ⊖ → ⊕

ア、いたわることば・・・ばかだなあ…。

イ、たしなめることば・・・ばほ (ばかとあほをいっしょにしたことば)

② 転移しないことば

〔プラス傾向のことば〕 ⊕

ア、ほめことば・・・プリティー、すごいね、がんばったね、…。

イ、応答ことば・・・ありがとう、なるほど(あいづち)…。

ウ、励ましのことば・・・がんばってね、おいしいよ、あきらめるな、捲土重来…。

〔マイナス傾向のことば〕 ⊖

ア、しらけことば・・・ふうん、それで、勝手にすれば、別に、それでどうした、なにやってんの…。

イ、責めことば・・・はやくしなさい、いいかげーん、そんなこともわからん、あの人はああいう人だけん…。

生活語いの実態を把握し、「私とことば」によるそれぞれの問題意識を喚起させたい。日本人の察しの文化に根づいた「察しのことば」は、今日、日常生活の特定の集団・関係や場面でしか通用しない飛躍した形で使われている。そのための弊害は顕著である。しかし、反面すぐれた感覚・勘を養う場ともなっている。

そこで、生徒たちの交わす「ことば」の有り様を探り、学習を通して場面や状況に応じた適切なことばの獲得と、勘だけに頼りがちな今の生徒の「ことば」に対する考え方にメスを入れことばの力に気づかせることを意図している。

2. 単元目標

(1) 生活語いを見直し、語いの文化性を高める態度を育てる。

(2) 「語い単元構成のマトリックス」の特に語義(類義・対義)、語感(素性・美醜・適否)

位相（所属・場面）の三領域に視点をあて、語いの拡充を図る方法を身につける。

(3) 場面や状況の中で的確にことばを選び、使える能力をつける。

3. 単元の学習計画（全12時間）

(1) 「私とことば」について、素朴な考えを書いたり、話し合うことにより課題意識を高める。

—— 4時間

(2) 「気になることば」と「心に残ることば」の二つの視点でことばを集める。集めたことばを分類し、自分の課題を設定する。

—— 2時間

(3) 生活語いを見直し、語いの文化性を高める。

—— 4時間

(4) 「私とことば」—— 察しのことばをめぐる—— というタイトルで、学習した語いを使って文章を書く。

—— 2時間

4. 単元学習の実践

学習者 島根大学教育学部附属中学校 第3学年4組

（昭和61年7月10日～9月8日）

(1) 第一次「課題意識を高める」

◎「私とことば」について、素朴な考えや体験を書く。

① 「私とことば」について最近考えていること。

「ことば、コトバ、言葉」。ことばは文字とかかわって私たち人間と深いつながりを持っている。人間が人間でありうるためには、言葉を欠かすことはできない。そこで、「私とことば」について、自分の考えを書く。また、単元を学習していく過程で自己の変容を捉え、自己評価の目安にする。

自分の感情を表すためだけだったら、言葉はそんなに重要ではないだろう。考えや思想を伝えたいがために、あらゆるものを言葉と結びつけたのだと思う。人に何か伝えるにしても、それが、ただ相手にぶつけるだけでは完全な会話にはならないのではないだろうか。やはり、思いやりのある自分なりの言葉を使うことが一番で、人間らしさにつながるのだと思う。

（N子）

私たちは、普段、自分の意思を伝える手段として実に何げなく言葉を使っています。言葉に対する意識というも低いものだと思いますが、ここで言葉についてもう一度深く考えてみる必要があるだと思います。この「考える」ことこそ言葉の奥のしんとしているものです。考えなしの言葉は底が浅く、他人の心の中にまで響きません。

（M子）

② 自分の体験を書く

ことばには、「心に残ることば」「慰められたことば」「勇気づけられたことば」また、「傷つけられたことば」などいろいろある。そのような生きたことばを話し手と聞き手の関係で捉え、その時の場面状況がわかるように書く。

—— 心に残ることば ——

小学校の時、先生からいろいろ教えられたことばがある。3年生の時、担任の先生に「あなたは遊びの天才だね」と言われたことが、今だに心の中に残っています。その頃の私は、毎日何時間も遊んでいたし、いろんな遊びを作ったのです。5年生の時は、1学期の初日、先生が教室のみんなに、「君たちは人間かロボットか？」という話をして下さいました。これは自分自身の考えを持って行動ができるかどうかという意味です。また、その先生は、「食べることも大切だが、出すことはもっと大切だ。」と、よく言われました。これは身体のことだけだと思っていましたが本当はその裏に秘められた大切なことを言われたのだと思います。

(N子)

私の読んだある本の中で、登場人物のセリフにこういう言葉がありました。「死んでいく花よりここに生えている花の方がどれだけ美しいか分らん」、これを読んで私ははっとしました。死んでいく花とは名人が生けた生け花です。ここに生えている花とはいわゆる雑草です。

私たちは目先の美しさにとらわれて本当の美しさ(生命)を見過しているのではないのでしょうか。この言葉は「生きる」ことのすばらしさを知っている人でなければ言えないでしょう。しかし、それに対して名人はこう言いました。「私たちは一瞬の芸術を求めているのだ」、「死ぬ前に晴れの舞台に立たせてやるのは無駄か」と。私にはどちらの言い分も正しいように思えます。しかし、これだけは言えます。生命の美しさが分からなければ、その人はどんな美も分かっていないのだと。

(M子)

—— 気になることば ——

自分の意見とくい違うことを、たたきつけられるといやな感じがする。また、「だめだ」「そうじゃない」と強く否定されたりすると嫌いになってしまう。悪口で「バカ」とか「アホ」とかはすぐ忘れてしまうけれど、自分についての個人的な悪口はいつもいやな気分で聞いてしまう。また、手伝いなどをした時「なんでそうダメなの？」と強く言われると、すごく不快な気分で、もう手伝いなんかするものか、という感じになります。

(N子)

言葉とは、簡単なようでいてむずかしいものです。例えば、謙遜ということばがあります。自分ではへりくだった気持ちで言っている、他人から言われると内心腹が立ってしまう。それが人間というものだと思います。言葉とは、いつも本心と必ずしも同じとは限りません。だから、言葉が足りなくて相手に本心が伝えられないこともあります。他人を誤解してしまうこともあります。でも、逆に本心と違うことで利点もあるのです。例えば「おせじ」はいやな感じがしますが、言われて悪い気はしないはず。言葉が対人関係の潤滑油になるといいと思います。

(M子)

◎学習教材として次の資料を与える

「日本人の言語表現」 金田一春彦

「あいさつのことば」 川崎 洋

「おしゃべり」 柴田 武

「毎日のことば」 柳田国男

「ちょっといい話」 戸板康二

「日本人の言語表現」の一節 金田一春彦

「では、お母さんによろしくね。」「今ちょっと出ておりますが、もうそろそろ帰って参りますから、しばらくお待ちくださいませんか。」とか、「ぼつぼつ」など、外人にはとうてい理解し難いことばが日常語として当り前に使われている。このような日本人特有の不完全ことばによって、日本人は相手の心を察しようとする勘を育ててきた。いわゆる、日本語の察しの文化である。筆者は最後に—— それにしても、相手のことばが分からなくても、その気持ちを知らうとする努力、これは貴いというべきではないか。ヨーロッパのホテルは、タイのホテルと違い贅美を尽くしており、そこに勤めているボーイも、日本人だったらテレビのスターになれそうな容貌・身のこなしをしている。しかし、わたしには、そんなものは、人の心を察しようとする思いやりの気持ちに比べれば、三文の値打ちもないように見えたのである。—— と結び、日本語のもつ奥行きを説いている。

(2) 第二次「自己課題の設定」

- ①「気になることば」と「心に残ることば」の2つの視点でことばを集める。
 - 1) 「ことば」が交された場面状況をきちんとおさえる。
 - 2) 「ことば」のやりとりの相手との関係をはっきりと捉える。
 - 3) 相互の気持ちのずれ、通い合いなどをはっきりとする。
 - 4) 「ことば」のイントネーション、強弱、その他の表情なども。
 - 5) 交された「ことば」の意図がわかるように文章化する。
 - 6) 取り上げたわけを書く。
- ②収集したことばをいくつかに分類し、見出し語をつける。
- ③自分自身にとっての問題意識を明確にし、自分の課題を設定する。

—日本語の「察しの文化」— 〈日常よく使われることば〉

① 「ことば集め」 ② 「分類」

(取材カードより)

転 移 し な い こ と ば	
マイナス傾向のことば (気になることば)	プラス傾向のことば (心に残ることば)
① せかせることば はやく〇〇しなさい 〇〇しなさい もたもたするな とつとやれ もういくよう まだやってるの 急がないと あと一分 two weeks	① ほめことば (人の良さを認める) ナイスシュート 巧い プリティー よくやった おいしいよ すていね おもしろい おめでとう センスいい 楽しいよ すてきだよ
② 責めのことば (のしり) うそをつくな 何か文句あるか うるせえ くそつたれ 卑怯者 やれるもんならやってみろ さばるな いいかげーん そんなこともわからん ガキ ざまあみろ うそばっかし なにやっちゃようや 幼稚 余計なことするなや 冗談じゃないよ どうしますか ふざけんよ てめえら まだできちゃらん 本気にしたけんね おまえたちは程度が低い	② 励ましのことば あともう少しだったね やればできる 大丈夫だよ がんばって やったあ もう一本 調子いいよ よくやった あともう少しだ ファイト おいしいよ 元気だして 君だったらできる おもいきり また来てね あきらめるな おいしい、おいしい 手伝おうか がんばったね 気にするな そんなことない どんまいどんまい
③ いじめことば (排他的、仲間に入れない) おまえはいいや (いいや、いいや) あんたには関係ないことですよ ごめんですむことじゃないでしょ おまえだめだなあ そんなやつほっとけ 勝手にしたらしいでしょ なにもわかっていないくせに あんたいやだわ 一回死んで 二、三べん死んで	③ 慰めことば あと大丈夫だから次ががんばろう 早くよくなれよ どうしたの どうしますか すんだことしようがないわや ごくろうさん まあいいがや ごめんなさい 今度ががんばろうね 私も好きだよ 女にせんでもいいがね
④ 弱点をつくことば (侮辱) のぼせえなや たいこもち ばかみたい けち バカ ひ弱 ばっかじゃない これやっついてあとでお前が困るんだ おまえのせいだ あんたなにいっちゃうね ガキ 子ども 何考えてるの どうしてこうなるの あほ	④ 応答ことば ありがとうございます うんわかった いいよ さようなら おはようじゃあねバイバイ どういたしまして バイバイ いいえ、いいえ もしもし さようなら
⑤ しらけことば 静かにしてよ それで 〇〇のどこが 最低/しけ 死ぬ 別に かってにやれや あっそう あっほん と それから マジ 私には関係ない そりゃよかった それがどうした ヤバイ かってにやったら そんなことせんでよ ふうん それで がんばれば ああやっぱり あっそう よかったね なんかいって どっちでもいい なんだ そりゃ そうなんじゃない あんたがそう思てればそうかもしれないね といつなんかいっちゃうで おれしらん さあ〇〇君だないかや	⑤ なつかしい響きのあることば 灯消して あげあげ 人間ですか おじじ ぼつぼついきましよう だんだん
⑥ 僻みことば 私ばかりでん どうせぼくはほかですよ どうせ「……」でわるかったね 「……」のくせに どうせ「……」でしょ ほっといてよ ごめんね あんたそれでも人間ですか	⑥ 自分にいい聞かせることば ファイト 位置についてヨーイ でも～ おちつけ しっかりやれ さあやろう よし、やるぞう
⑦ 謙遜ことば つまらないものですけど 私「…」が 悪かったけん めいわくでしょうけど (自分を何でもかんでも悪くいう)	⑦ リラックスことば 負けて当然だ リラックス・ユアセルフ 打倒〇〇/ 相手を苦しめろ (外に気持ちを向けることば) ああ、おもしろかった 万歳三唱 (自分に素直になること)
⑧ 乱れことば ぜんぜんいいぞ ずつうがいたい 葬金のお金くつうがいたい 「太陽にはえろ」がやる ソースとって 汚名ばんかい	⑧ 曖昧ことば どうも あっそう どっちでも どうかね
⑨ 曖昧ことば (やたらと省略) うそね ほんと ほお でもねえ まあ、そうかもね どう思う なんでもいいよ じゃないのでしょう 別に	⑨ その他 心に太陽を持って 初心忘るべからず 人間かわることができるんだ 死んでいく花より生きてここに生えている花のほうがどれだけ美しいかわからん (生け花と雑草)

転 移 す る こ と ば (場面状況で)	
プラス傾向 → マイナス傾向	マイナス傾向 → プラス傾向
① プレッシャーことば がんばれよ よかったね おまえならできる 絶対に勝てる	① 思わせぶりのことば バックッ (甘ったれたいい方、曖昧表現) イヤーン (好意の気持で逆説表現)
② 嫌みことば ナイスシュート あんたかっこいい あんたかわいい よくやった よかったね ごめんなさい 最高	

③ 課題の設定

(I 生徒の場合)

〈私のテーマ〉

重々しい言葉から気軽な言葉へ変化してきた日本語

(テーマの解説)

最近、気軽に使える言葉に変化してきていると思う。そういう言葉を使う場合は、やはり友だちとの間であって、目の上の人には敬語を使う。相手によって使い分けが必要であると思う。

(3) 第三次「語いの文化性を高める」

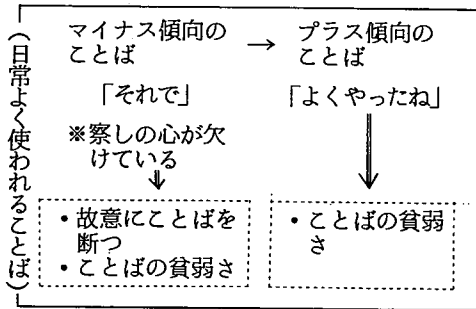
◎「学習の手引き」より

- 生活語いの見直し

ことば + 心(思いやり)

→ 通じ合い、わかり合い

↑
※察しの心(日本語の「察しの文化」)



「ことば」は本来“通じ合う”“わかり合う”ものである。しかし、日常交わされている「ことば」の実態は必ずしもそうではない。

そこで、日常よく使われているマイナス傾向のことばの実態を明らかにすることにより、日本語の持つ「察しの文化」のよさを学ぼうとするものである。そして、ことばの貧弱さに気づき、少しでも自分たちの生活を向上させるために、生活語いを見直し、語いの文化性を高める学習である。

◦表のまとめ方

(日常よく使われることば)			
マイ ナス 傾 向 こ と ば	◎分類<しらせことば> 「それで」 ・類義語 ()	プ ラ ス 傾 向 こ と ば	◎分類<褒めことば> 「よくやったね」 ・類義語 ()
体験談		体験談	

※ 語いの文化性を高める

↓ (「類語新辞典」〈角川による〉)

(日常あまり使われない気のきいたことば)	
◎分類<褒めことば> 「あなたの人徳ですね」 その人に備わっている徳 ・類義語 (拍手喝采、絶賛、……)	対義語 ◎分類<あざけりののしることば> 「のぼせえなや」と口汚く 「誘(そし)られた」 人を悪く言っておとしめる ・類義語 (偽す、扱き下ろす、……)

。語い調べの観点

① 語 義

- ア(類義 -- 走る=かける。光る=輝く=照る=きらめく。) 「差異性」
 対義 -- 暑い=寒い。内=外。(対応)
- イ(一般 -- せんべいをかじる(固いものをかむ-辞書的な意味、一般的)
 特殊 -- ピアノをかじる(ちょっとたしなむこと-場面状況や文脈によって特殊化される)

② 語 感

ア、語のさすもの -- 「ほたる」=美しい、はかない感じ。「要求する」は「要望する」よりも強い感じがする。

※語のさし示すことがらや物によって受ける感じがちがう。(感情移入、個人差がある)

- イ、素性(本来の性質) -- 漢 語(簡潔で力強い感じ)
 和 語(まるみのあるやさしい感じ)
 外来語(モダンな感じ、高級そうな感じ)

※語の素性や使われ方からくる感じのちがいがい。

ウ、形 -- 擬声語<ガタガタ>。擬態語<じっとり>。語の発声形式からくる感じのもの<四=死>。文字の配列形式からくる感じのもの<子どもの名づけ>

エ、美醜・適否 -- 美醜・適否からくる感情、感覚のちがいがい。

③ 位 相

- ア、所 属 -- 社会集団のちがいがいによって使用語いが異なる。(職業の違いなどから)
- イ、場 面 -- 場面や状況のちがいがいによってことばがちがってくる。
- ウ、性 別 -- 男性ことば。女性ことば。
- エ、年 令 -- 年令差によることばのちがいがい。

◎「学習の手引き」による実践

〈語いの文化性を高める〉——(I 生徒の場合)

(日常よく使われることば)	
マイナス傾向のことば	◎分類<せめことば> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">あ・ぶ・な〜い</div> ・類義語 (きわどい、やばい)
プラス傾向のことば	◎分類<ほめことば> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">プリティ</div> ・類義語 ナイス ラッキー トロピカル エメラルド ビューティフル ワンダフル サーモンピンク アドベンチャー ジャスミン

(体験談)

友達とお話をしている時に調子に乗りすぎて、残酷な話になったり、人に迷惑をかけた時に、「あ・ぶ・な〜い」と一言。感情を表現する時にも使える流行語のようなものだと思う。もともと危いの意味とは違う。

(体験談)

昼休みなどに遊んでいて、友達が活躍した時、「プリティ」とか「ナイス」とか言って友だちをほめると楽しくってくる。友達の間で気軽に使えると思う。英語のPrettyの意味とは違う。流行語のようなものである。



(日常あまり使われない気のきいたことば)

◎分 類くせめことば)

後ろ指をさす

・類義語

(1) 国語辞典で調べる

(陰で非難される)、陰(人が見たり、聞いたりしない所)、こっそり(人に気づかれないように何かをする様子)、非難(他人の欠点や過失を取り上げ、それは悪いと責めること)、欠点(不十分、不完全な所、非難されるべき所、短所) 過失(そうするつもりは全くなかったのに悪い結果をもたらすこと)、責める(怠慢約束の不履行、あやまちをとがめ、なじる) 怠慢(心がけが悪く、やるべき仕事をきちんとやらないようす)、なじる(悪い点を問いつめて非難する)

(2) 漢和辞典で調べる

- ・陰(ひそか、秘密にして人に知らせない、陰口)
- ・非(そしる、せめる、とがめる)
- ・難(なじる、せめる)
- ・指弾(つまはじきする、非難する)
- ・攻撃(強く非難する)

(3) 他の資料で調べる

類語辞典、ことわざ辞典、慣用句辞典など

- ・四面楚歌(周囲から非難する)
- ・皮肉(遠回しに非難する)
- ・痛棒をくらわす(手厳しくしかる)
- ・槍玉に挙げる(欠点を指摘して非難の対象にする)
- ・取っちめる(動きをとれなくしてひどく非難する)
- ・聞き咎める(うるさく問いただしたり、非難したりする)
- ・非を打つ(欠点をあげて非難する)

対義語

◎分 類くほめことば)

推 賞

・類義語

- ・激賞(非常にほめること)
- ・賛美(心からほめたたえること)
- ・絶賛(この上なくほめること)

◎分 類く尊敬ことば)

傾 倒

・類義語

- ・崇拜(あがめ敬うこと)
- ・心酔(非常に感じて、心から敬うこと)
- ・仰望(仰き望むこと、尊敬して敬うこと)

-----く「分類別による語い調べ」から-----

a、自分に言い聞かせることば

T君 「打倒〇〇!」 〇〇には、人の名前がくる。これはリラックスことばで、テストがある時この言葉を言うと「よし、こんどやるぞ」という気持ちになる。「打倒」には打ち倒すこと。打ち負かすこと。ノックアウトなど意味がある。いずれも他に威圧感を与えることばではなく、すべて自分に向けられた言葉である。

Oさん 「よし!」。安心できることばである。緊張したときに、一言いい聞かせるとわりと安心できる。類義語には、「決断」(きっぱりと決めること。善悪、正邪を裁くこと)、「独断」(独り決め、「—専行」「—的」)の漢語があるが、「よし!」の意味は、この二つのことばの間を揺れている。

b、人に話しかけることば(話しかけられることば)

(1) 転移することば

〈プラス傾向のことば → マイナス傾向のことばへ〉 ⊕ → ⊖

K君 「すごい!」。なんでもかんでも所かまわず使われる。まさに、「濫用」(むやみに使うこと「職権濫用」)⇔「乱用」(みだりに用いること)である。日本語の持つ「柔らかさ」と「難しさ」。場面によって意味が変わる。(柔軟性)それ故に使い勝手の難しさがある。故事成語に「白髪三千丈」という言葉があった。

Iさん 「よかったね」。いやみことばである。日本語は聞き手の気持ち、話し手の気持ちで快にも不快にもなる。類義語に「咎める」「—立てる」「^{けな}貶す」「^{そし}誇る」「ごんする」などがあつた。

〈マイナス傾向のことば → プラス傾向のことばへ〉 ⊖ → ⊕

Mさん 「ばほ」(「ばか」と「あほ」の間、「ばら」(「ばか」と「だら」の間)は、最近はやりの若者ことば(流行語)である。直接的でなく、気持ちよく受けとめられる。ゆかしくたしなめる効果がある(「無作法を—める。」)。類義語には「愉快」「気やすさ」があり、対義語には「見下す」「^{そし}誇る」「^{そし}誹謗する」「毒突く」「中傷する」などがあつた。

(2) 転移しないことば

〈プラス傾向のことば〉 ⊕

I君 「プリティ」「ナイス」は気軽なほめことばである(流行語)。友だち間でよく交され、気持ちが通じ合つて楽しくなる。慣用句に「笑^{よつぽ}壺に入る」「悦に入る」などがあつた。

S君 「さすが—!」。生活を楽しむ、ほめことばである。漢字で書くと「流石」であること。夏目漱石は「漱石枕流」の話に感心して借用した当て字であること。故事成語(「枕石漱流」→「枕流漱石」)の言葉であり、負けおしみの強いことのとえ、また、こじつけであること。対義語に「不手際」などがある。

I君 「しゃきっとしろよ」。励ましのことばで、ぼくの好きなことばである。類義語には、「入魂」「背水の陣」(「—をしく」)があり、対義語には「散漫」「無節度」などがある。

〈マイナス傾向のことば〉 ㊦

Kさん 「のぼせるな」。人の弱点をつくことばである。類義語には「舌を出す」「甘くみる」「見下す」「侮辱する」「軽蔑する」「さげすむ」「野次る」「半畳を入れる」(「半畳を打つ」非難、からかい)「水をさす」「あざける」「はやしたてる」「もてあそぶ」「尻目にかける」(「流し目」、さげすむ意もある)

hさん 「ふーん、それで?」。しらけことばである。日常、友だちにプラス傾向のことばが使えず、つい使うことばである。類義語には「^{けな}貶す」「^{ののし}罵る」「毒突く」「責め立てる」「当てつけ」「^{つまはじ}爪弾き」(「—にあう」)などがある。

—「語い調べ」… 観点別に吟味する) 「のぼせるな」のことばに関して (K生徒の場合) —

語 い	領 域				語 義					語 感			位 相			
	類 義	対 義	一 般	特 殊	語 さすもの	素 性	形	○美 ×醜	○適 ×否	所 属	場 面	性 別	年 令			
○軽蔑する ・侮辱する ・見下げる ・蔑む(さげすむ) ・見下す ・侮る(あなどる)	○		○		○	漢	○	×								
○舌を出す	○		○		△	和		×								
○甘くみる	○		○		△	和		×								
○尻目にかける	○		○		△	和										
○崇拜する ・崇める(あがめる)		○	○		○	漢	○	○								
○敬う		○	○		△	和		○								
○慕う		○	○		△	和		○								

㊦ 語義の特殊(ピアノをかじる 相手をのむ 耳が痛い など)は慣用句に多いが、ここで言っている「転移のことば」も同じように考えている。

㊦ 語感、位相においては、場面、状況と受けとり方で異なってくる。そのような微妙なことばのちがいに気づく場であった。(「表の書き方」に問題があった。)

— 〇題名「ことばの魅力」(I生徒) —

友だちとの間で使うぼくたちの言葉には、少しおかしな日本語がたくさんある。短縮された言葉(「タやけニャンニャン」を「タニャン」)や、順序を入れかえた言葉(「におい」を「おい

にい」)、それに流行語などが、その例である。しかし、友だちとの間でむやみに敬語を使ったり、きどった、堅苦しい日本語を使って話すよりも、今のままの方がずっといい。ぼくたちの使う言葉には、チラリと光る何かが隠されているのだと思うからである。

ぼくたちは普段、昼休みによくサッカーをするが、友だちのシュートが決まると、「プリティ」とか、「ナイス」とかを口々に叫んで友だちをほめる。シュートを決めた人は、こういう言葉を聞くと、うれしくなって、「もう一本！」などと思ったりする。もし、シュートを決めた時、敬語や、堅苦しい言葉で、あたかも賞状を読む時のように、「〇〇殿、あなたは、大変優秀な成績を納め……」などと賞賛されると、相手も自分も噴き出す以外にない。あるいは、うれしさや楽しさなどの感情がうすれるばかりでなく、全くしらけてしまうことさえある。つまり、キラリと光る気軽な言葉こそ、その場に応じた生きた言葉であり、大事にしていきたいと考えている。

「プリティ」という言葉は、元来、英語の「Pretty」、つまり、かわいいなどの意味だが、ぼくたちは、プラスイメージとしてのほめ言葉、喜びを表す言葉として使っている。ところで、このほめ言葉には、何種類ぐらいの言葉がどれくらいあるのかと思い、類語辞典で調べる学習をした。その結果、たくさんの語いの発見ができた。中でも、「推賞」(人に向かってほめること)とか、「笑壺に入る」(思い通りになって喜ぶこと)また「悦に入る」などは心に残った言葉である。対義語には、「うしろ指をさされる」(陰で非難される)とか、「四面楚歌」(周囲から非難される)など、今までぼくの知らなかった、漢語や慣用句、それに故事成語の言葉を見つけることができた。新しい言葉の発見は、今までの使い慣れてきた「プリティ」とは、一味ちがった喜びを持つことができた。こういう言葉の学習をしていなければ、数年後、テストとかに出題されていても、むなしく次の問題へと目を移し、2、3点捨ててしまうというはめになっていたかもしれない、など思ったりもした。とにかく、この学習によって、ぼくの生活語いのレベルが高まったことは事実である。

気軽な言葉には、とまどいなく使えるよさがある。感情が表現しやすく、明るい雰囲気をつくってくれる。ごく親しい友だちに対してはなくてはならない言葉である。しかし、不都合な場面が無いでもない。自分なりに反省して考えてみる必要がある。気軽な言葉だって、オールマイティではないからである。日常安易に使っている言葉に安住してばかりはおれない。これから先、目上の人に話す時や、入社試験などの面接、お見合い(?)等の、いろいろな場面に遭遇する。そのような時、気軽な言葉だけでは通用しないことになるだろう。学習を通して、語いを豊かにし、生活語いのレベルアップが、今こそ必要である。「プリティ」のよさも肯定しながら、それ以上に多くの言葉を獲得しなければならぬ。その場面場面にあった適切な言葉が使え、その言葉に磨きをかけることによって、心と心が通い合う、よいコミュニケーションをつくりたいと考えている。

(評) 特設単元「ことばの有様」を考える ― 日本語の「察しの文化」 ― のまとめとして書かれた文章である。「プリティ」ということばの持つ日本語特有の察しの文化に着目し、考えを深めている。そして、語いの文化性を高めるために、語いの拡充を図る努力がみられる。(ともしび№7 2号より- 1987.3 -)

5. 考 察

段階	単元の目標	単元の展開	分 析 ・ 考 察
開	<p>◎ 生活語いを見直し、改善する態度を育てる。</p> <p>○ 課題意識を育てる。</p>	<p>第一次 課題意識を高める</p> <p>1. 「私とことば」について自分の考えを書く 〈個別化学習〉</p> <p>2. 体験談を書く 〈個別化学習〉</p> <p>3. 資料(論説文)を読む 「日本人の言語表現」金田一春彦——を中心教材として 〈一斉学習〉</p>	<p>1.について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ことばは伝達的手段として、また、考えを深めたり、思想形成になくてはならない。しかし、思いやることばを通して心の通じ合う大切さを強調している。 ・何げなく使っていることばへの反省、「考える」ことの大切さを書いている。 ※「しらせことば」「いじめことば」の濫用に対し強く反省し、改善を求めている。 <p>2.について</p> <p>〔心に残ることば〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先生、先輩、両親から聞いた話 「君は遊びの天才だ」「君たちは人間かロボットか」 ・読書により 「死んでいく花よりここに生えている花の方がどれだけ美しいかわからん」 〔気になることば〕 ・一方的にたたきつけることば。個人的な悪口。誠意が通じない。誤まった敬語の使われ方。舌たらずによる誤解。 ・ことばの二面性(「おせじ」の効用など) <p>3.について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「よろしくね」「もうそろそろ」「ぼつぼつ」に代表される日本語の察しのことばをめぐって文化論を展開している。 ※この教材を中心教材として、他の教材も用いて単元が各生徒に価値づけられた。また、「私とことば」について考えも深まり、課題意識を高めることができた。
示	<p>○生活語いの実態をつかむ</p>	<p>第二次 自己課題の設定</p> <p>1. 「気になることば」と「心に残ることば」の</p>	<p>1.について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体験談や日常生活の中からことばを集める。「ことば」「状況」「取りあげたわけ」の三項目による取材カードを作成する。 <p>2.について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・分類と見出し語は生徒と教師の合作である。

段階	単元の目標	単元の展開	分 析 ・ 考 察
		<p>2つの視点でことばを集める。 〈個別化学習〉</p> <p>2. 収集したことばを分類し見出し語をつける。 〈個別化・小集団学習〉</p> <p>3. 問題意識を明確にし、課題を設定する。 〈個別化学習〉</p>	<p>※分類と見出し語づくりは生活語いの実態を把握するのに有効な学習法である。学習過程の重要なポイントとしたい。「転移しないことば」から「転移することば」の発見は、テーマとかかわって価値あることである。</p> <p>3.について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「私のテーマ」「テーマの解説」の2つについてまとめた。 <p>※個の学習（「考えを書く」「体験を書く」）から一斉学習（中心教材を読む）そして、個の学習（課題の設定）にもどる学習形態の組み合わせは問題意識を高めるために有効であった。</p>
悟	<p>◎語いの拡充を図り、その方法を身につける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○辞典の活用 <ul style="list-style-type: none"> ・国語辞典 ・漢和辞典 ・類語辞典 ・慣用句辞典、ことわざ大辞典、反対語辞典 ○「語義」「語感」「位相」の観点から 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">第三次 語いの文化性を高める</div> <p>○語いの拡充を図る 〈個別化学習〉</p> <p>1. 日常よく使われることばについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マイナス傾向のことば ・プラス傾向のことば <p>2. 日常あまり使われない気のきいたことばについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・類義語 ・対義語 ・故事、ことわざ、格言 <p>3. 語い調べ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・語いの働き 	<p>1.について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分のテーマとかかわってことばを決め、その体験談を書く。 <p>※若者ことばは氾濫し、特定の場や集団で使われている。そして、結構楽しんで気持ちの交流を図っている。</p> <p>※「転移することば」は、学級の1/5の生徒がとりあげていた。アクセントやイントネーションの微妙な違いからくることばの転移の妙味に気づいたようである。</p> <p>2.について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・辞典類を駆使して語いの拡充を図った。1つの方法は「あることばを辞典で調べ、出てきたことばをまた辞典で調べ、語いを広げていく方法である。もうひとつは、グループで知っていることばを出し合ったり、予想を立てて調べる方法である。 <p>※未知のことばの発見は個々の生徒にとって大きな喜びであった。また、生徒相互の調べ学習に有効な題材でもある。</p> <p>3.について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・辞典類で調べた語いを三つの観点でそれぞれおさえ、語いの働きを学習する。また、語いの拡充も図る。 <p>※三つの観点でそれぞれの語いの働きをおさえることによって、微妙な相違点を理解することができた。</p> <p>※語感の「適否」や位相については、そのことばが使われた状況や相手等によって全く異ってくる。</p>

国語科における「学ぶ力」を育てる単元学習の実践

段階	単元の目標	単元の展開	分析・考察
入	<p>◎本来あるべき「ことばの有り様」を考える。</p> <p>・日本人の察しの文化に根づいた「ことば」の獲得</p>	<p>第四次 学習した語いを使って意見文を書く (「私とことば」 一察しのことばをめぐって)</p> <p>1. 意見文を書く (個別化学習) ・使用語いの拡充 ・場面ま状況の中での的確に使える能力</p> <p>2. グループで読み合う (小集団・一斉学習) ・人の心を察し、思いやる気持ちに支えられた「ことば」</p>	<p>ことばの機能を理解する上で有効な学習である。 ※語義の「一般と特殊」は、転移することばで捉えることができる。 (「バカ、イヤーン」$\ominus \rightarrow \oplus$ 「がんばれよ、よくやったね」$\oplus \rightarrow \ominus$)</p> <p>・「察しのことば」をテーマにした意見文を書く。 ※日本語特有の察しの文化に具体的な「ことば」を通して触れ、考えを深めることができた。 ※生活語いの貧弱さに気づき、語いの拡充に役立った。 ※日常安易に使っていることばが、「人を傷つけ」、「人を遠ざけ」たり、「自分の心の貧しさ」に気づく契機となった。</p>

6. 評 価

今日的課題である“学ぶ力”の育成は、国語科における“単元学習”によって達成されるものと捉えた。ことばの乱れの実態を鑑み、本来あるべき「ことばの有り様」を試行した。人の心を察し、思いやる気持ちに支えられた日本語特有の察しの文化の意味を問い直す単元であった。そこで、三つの単元目標(「態度」・「方法」・「能力」)に照らして評価する、

- ・ 第一次「課題意識を高める」における「1.自分の考えを書く」「2.体験談を書く」の学習活動は、自己に問いかける個の学習を重視し、「3.資料を読む」では、金田一春彦氏の「日本人の言語表現」を教材として個の学習をゆさぶる一斉学習を設定した。個から一斉学習への流れは課題意識を高めるのに有効な方法であった。

- 第二次「自己課題の設定」において、再び個の学習に戻り、ことばの収集、分類、見出し語づくりと一連の学習活動を通して自己の学習課題を設定した。この第一、二次の学習は、「開示悟入」の「開と示」に相当するもので導入段階を個から始めて個にかえる学習過程を組んだ。この学習形態は、学習が自分のものとして主体的に取り組む態度形成の上で有効であった。
- 第三次「語いの文化性を高める」は、生活語いを高め、見直すために語いの拡充を図ることと、その方法を身につけることをねらいとした。個別化学習を中核とし、学習の過程に相互学習を取り入れることによって意欲的に新しいことばを獲得した。この「悟」に相当する学習の場では、個別化を中核とした相互学習が有効であった。
- 第四次「意見文を書く」は、第一、二次の「開示」で学習したこと個々の変容の姿「入」として捉えるのに有効であった。ただし、使用語いを拡充し、場面の中での的確に使える力（文章力）の学習には、十分時間をかけることができなかった。

IV まとめと今後の課題

今日、学ぶ力の育成を願い、教育のあり方を論じ、改革を求めて様々な教育実践が試みられている。いわゆる、明治以来の西欧の文化に追いつけ、追いこせの掛け声のもとに行われた教師主導型による一斉授業からの脱却であった。新しい時代への過渡期に立たされた教育の大改革でもある。

本研究は、自己教育力を「学ぶ力の育成」と捉え、教育の原点である「学び手」の側に立った教育実践の究明である。一斉授業から個別化学習への転換であり、生徒一人ひとりの個性を尊重した個への挑戦であるといえる。喚言すれば、教師自身の教育観、思想の転換を必要としている。

「学ぶ力の育成」の具現化を国語科における単元学習と捉え実践してきたが、今後の課題として次の二つをあげる。

- ① 自己評価の場をきちんと設け、生徒に厳しく自己反省させる場を設定することである。学習で得たものを吟味し、フィードバックして、見直すことにより新しい課題が生まれる。
- ② 「学習の手引き」の工夫である。教師が与えるというより、生徒が創っていくものである。教師はこの手引きにより学びの過程がチェックでき、生徒にとっては自らの学習過程をチェックし、自己評価できるのである。そして、単元の終了時にはひとつの冊子ができあがるのである。

〈参考文献〉

- 語いの指導（倉澤栄吉・島根国語懇話会編著） ◦ 大村はま国語教室 ①（筑摩書房）
- 自己教育力を育てる先生（北尾倫彦著・図書文化） ◦ 教育展望（教育調査研究所）